

一八八六年三月十五日(月)

三味サマーデーの寺院

次の朝。今日は月曜日、チョイトロ三日、一八八六年三月十五日。午前七時〜八時。タクールは少し楽になられたようで、信者たちを相手に静かにゆっくりとひくい声で、ときどき手真似をまぜながら話していらつしやる。傍にはナレンドラ、ラカール、校長、ラトウ、シンティのゴパールたちがいる。信者たちは口には出さないが、前夜のひどい病状を思い出しながら、胸もつぶれる思いで黙然と聞いている。

〔タクールの見たもの——神、生物、世界〕

聖ラーマクリシュナ「(校長の方を見ながら信者に)——何を見たと思う? あの御方がありとあらゆるものなっていないさるんだよ! 人間や動物を見ていると、ちょうどナメシ革で作った容器もとののようだね、その中であの御方が、手足や頭を動かしていないさるんだよ! 前にも一度見たことがあるが——蠟ろうで出来た家——庭も道も人間も牛も何もかも蠟ろうで——何もかも一つの同じモノで出来ているんだ。

「そうなんだよ——供犠いけにえの首を刎はねる人も、供犠いけにえになる動物も、供犠いけにえの首を置く屠殺台も、みんなあの御方がなつていなさるんだ！」

衆生の苦しみを憐れんで、自分の肉体を人びとの幸福のために供犠いけにえ台にのぼせている——タクールはこのことをおっしゃったのだらうか？

神自身が、首を刎はねる人にも、供犠いけにえの動物にも、供犠いけにえ台にもなつておられる——こうおっしゃるうちにタクールは、強烈な法悦境に引き込まれて嘆声をおあげになつた。——「アハー！ アハー！」

そしてまた、例の前三昧境！ タクールの外部意識は消えた。信者たちはなす術すべを知らず、押し黙つて坐っているばかりだ。

タクールは少し意識が戻られると、またおっしゃつた——「今わたしは、ちつとも苦しくない。以前まえとおんなじだよ」

タクールの、この言葉を超越した境地を見て、信者たちは驚いて見ている。ラトゥウの方を見ながら、タクールはつづけておっしゃる——

「あれ、ラトゥウが頭に手をやって坐つてござる。——あの御方イシユウラ（神様）が頭に手をのせていなさるよに見えるよ！」

タクールの信者たちを見る目に、とろけるような愛情が溢れこぼれている。まるで、かわいい赤ん坊でもあやすように、ラカールとナレンドラの頬ほを撫なでていらつっしゃる！

「リーラーを終えられるのはなぜか？」

少したって校長におっしゃった——「体がもう何日か保てば、(何人かの)人の霊性が目覚めるだろうに……」そして又、沈黙なされた。

タクールは再びお話しになる——「こんどは保たないだろう」

信者たちは、タクールが次に何をおっしゃるかと思つて耳をすましている。タクールはお続けになる——「こんどは保たないだろう。バカ正直で頭が悪いのを見て、人が利用するようなことにならないようにね。とにかく、バカで単純だから、相手かまわず何でも与えてしまつてはよくないしね！ カリの時代ユガ(現代)の人は、瞑想にもディヤーナ称名にもジャパ関心がないし——」

ラカール「(やさしい声で)——もう少し、お体が保つようにお頼み下さい」

聖ラーマクリシュナ「それは、神様の思召おほしめし次第だ」

ナレンドラ「あなた様の意志と神様の意志は一つになっています」

タクールは何か考えるように少し黙つておられた。

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラ、ラカールはじめ信者たちに)——今さら言つたところでどうなる？」

今はもう、一つになつてゐるんだ。義妹(訳註)をおそれて、聖女(クリ・マテイ)(ラーター)はクリシュナにこう言つた。

——「あなた、私の胸のなかに住んで下さい」と。あとでまた、クリシュナに会いたくてたまらなくなつても——以前なら氣狂いのようにあちこち探し廻つたのだが——もう二度と探し歩くようなこと

はしなかつた！」

ラカール「(信者たちに向かって、低い声で)——ガウル(チャイタニヤ)がアヴァターラだったということ、話していらつしやいますよ」

秘密の話——タクール、聖ラーマクリシュナとその伴侶たち

信者たちは黙然として坐っていた。タクールは彼等をやさしく見やり、ご自分の胸に手をおいて何かおっしゃるつもりらしい——

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラたちに)——このなかに二人いなさる。一つはあの御方」

信者たちは、次に何をおっしゃるかと耳をそばだてる——

聖ラーマクリシュナ「ひとつはあの御方——もうひとつは信者。信者であるその人が腕を折つたりした。信者であるその人がこんな病気になるっている。わかるかい？」

信者たちは沈黙している。

聖ラーマクリシュナ「いったい誰に話しているんだらう。誰がわかつてくれるんだらう」
しばらくたつてタクールは又、おっしゃつた。

(訳註) ラーターはすでに結婚しており、アヤナゴーシャという夫がいた。クリシュナに夢中になって探し廻っているラーターを見て、義妹はラーターを叱責していた。

「あの御方は人間になつて——アヴァターラ(神の化身)になつて——信者たちといつしよにこの世に來なざる。信者たちはその御方といつしよにこの世から去つてゆく」

ラカール「だから私たちは、あなた様があちらへ戻つていかないようにと祈るのです」

タクールは弱々しくお笑いになつた。そして——「吟遊僧バウールの一人がとつぜんやつてきて、踊つたり歌をうたつたりして、また、とつぜん去いつてしまふ！ 來たときも去るときも、誰も氣付かなかつた」
(タクールと皆、微笑む)

しばらく黙つておられて、又、お続けになつた。

「肉からだ体を持つていると、苦しみはつきものだ。

ときどきマーに言うんだよ。もう(この世に)來なくてもいいように、つて。

でもね、こういうこともあるだろう。よその家うちに招待されてごちそうを食べつけると、自分の家のダール(豆スープ)やご飯がうとましくなる。

それはそれとして、とにかく肉からだ体を着ているのは、ただ信者たちのためだけだよ」

タクールは信者たちのお供え物や、信者たちの招待や、信者たちと楽しく遊ぶことが好きなので、このようなことをおっしゃつたのだろうか？

〔ナレンドラの智識と信仰——ナレンドラの世俗の放棄〕

タクールはナレンドラをやさしく眺めていらつしやる。

聖ラーマクリシユナ（ナレンドラに）——賤民が肉をかついで歩いていた。シャンカラ大師がアンガーで沐浴したあと、同じ道を通りかかった。賤民がうっかりして大師にさわってしまった。シャンカラは怒って——「その方、この私にさわったな！」と怒鳴りなすった。すると賤民はこう答えた——「タクール、あなたも私に触りません。私もあなたに触りません！ あなた、よく考えて下さい！ あなたは体ですか？ 心ですか？ それとも知性があなたですか？ いったい何ですか？ 考えてごらん下さい！ 純粹真我は何ものにも汚されぬ——サットヴァにもラジャスにもタマスにも。三つのグナのどれにも影響されない筈でしょう。」

ブラフマンはどんなものか、空気のようにな、嫌な臭い、いい香り——いろんなものが空気のなかにあるが、空気それ自体はどれにも関わりない」

ナレンドラ「仰せの通りです」

聖ラーマクリシユナ「三グナを超越している。マールヤを超越している。無明のマールヤと明知のマールヤの両方を超越しているんだよ。女と金が無明現象、智識、離欲、信仰——こういうものはみな明知現象だ。シャンカラ大師は智識のマールヤを残しておきなすった。お前やここに

いる人たちがわたしを慕っているのもヴィデイヤマールヤだよ！

明知現象をつかみながら、あのブラフマン智にたどり着くんだよ。明知現象は階段の最後の一段、二段みたいなもの——もうじき屋上だ。人によっては屋上にのぼった後で、また階段を下りてくる。

——真理をつかんだ後でも、明知の私を残しておく。人びとを導くためにね。それから信仰の喜

びを味わうために——信者たちといっしょに楽しく遊ぶために」

ナレンドラはじめ信者たちは黙っている。タクールはこの言葉を通じて、ご自分の境地を話されたのであろうか？

ナレンドラ「僕が俗世間を離れる話をする、とても怒る人がいるのです」

聖ラーマクリシュナ「(甘い声で) 俗世を捨てるのは必要なことだよ」

タクールはご自分の体や手足を指しながらおっしゃる——「ある(大事な)ものの上に別のものを置いたら、下にあるものを取るには、上に置かれたものを除けなければなりません。上に置かれた別のものを除けなければ、下にあるものを手に入れることは出来ないだろう？」

ナレンドラ「おっしゃる通りです」

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに、やさしい声で)——あれ(種)ばかりを見ていたら、ほかのものが見えるかい？」(訳註、あれ——すべてを神が満たしている様子)

ナレンドラ「やはり、俗世を捨てるべきでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「だから言ったじゃないか。あればっかりを見たら、ほかのものは見えない筈だと。世間みたいなものが、少しでも目に入るかね？」

だから、心で捨てろ。ここに来る人たちは、誰も俗人なんかではないよ。まあ、人によってはほんのちょっぴり気が残っているが——女の人といっしょに住むという(ラカールと校長、苦笑する)。でも、そのことももう終わった」

〔ナレンドラと勇者の態度〕

タクールはナレンドラをやさしく見つめていらっしやる。見ているうちに、嬉しさでいっぱいになった御様子だ。こんどは信者たちのほうを向いてこうおっしゃった――

「大したもんだ！」

ナレンドラはタクールの方を見て、笑いながら言った。「何が大したものなんですか？」

聖ラーマクリシユナ「ハハハハハ。大した捨て方になってきた、というのさ」

ナレンドラと信者たちは黙ってタクールの方を見つめている。こんどはラカールが口をきった。

ラカール「(タクールに、笑いながら)――ナレンドラは、あなた様をとてよく理解していますよ」

タクールは笑ってこうおっしゃった。「うん、それに、みんなもよく理解してくれるようになったよ！

(校長に) ちがうかい？」

校長「その通りでございます」

タクールはナレンドラと校長を見て、それから手指の合図でラカールはじめ信者たちに、この二人に注意を向けさせた。先ず手まねでナレンドラを指して――それから、校長を指された。ラカールがタクールの合図の意味を理解してこう言った。

ラカール「(タクールに)――あはははは、あなた様はこうおっしゃりたいのでしょうか。ナレンドラは英雄の態度、そして、こちらの方は女友達の態度だと――」(タクール、お笑いになる)

ナレンドラ「ハハハハハ。この方(校長)はあまりおしゃべりをなさらない。恥ずかしがり屋でいらつしゃる。それで、そうおつしゃるのでしよう」

聖ラーマクリシユナ「ハハハハハ。そうだ、わたしはどんな態度だね?」

ナレンドラ「英雄、女友達——あらゆる態度をお持ちです」

〔タクール、聖ラーマクリシユナ——いったい誰なのか?〕

タクールはこの言葉を聞いて胸が喜びでいっぱいになられたらしく、手を胸にあてがって何か言おうとなさる!

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラたちに)——わかったよ、何でもこの中から出るんだ」

ナレンドラに目と手の合図で、「わかったか?」とお聞きになる。

ナレンドラ「(何でも出るの意味を)——創造の事物はすべてあなた様の中から!」

聖ラーマクリシユナ「(ラカールに向かつて嬉しそうに)——わかっただろう!」

タクールはナレンドラに、何か少し歌ってくれるようにとおつしゃった。ナレンドラはあるサンスクリットの詩を節をつけて歌った。彼の心は離欲の気持ちでいっばいだ。

人の命のはかなさは

蓮はぢの花にやどる露

聖者と共ひじりにあるときは

世の海わたる船のなか……

ナレンドラが一節か二節うたうと、タクールはすぐ合図をなさった。「なんだ！　なんだ！　そんなの月並みすぎるよ！」

ナレンドラは歌をかえて、こんどは女友達の気持ちをうたった歌にした――

ねえ、お友達――

人が生まれたり死んだりするのも

いろんな場合があるものね……

ヴラジャの若者はどこかへ去いってしまった

私としてはもう、死ぬほかありません

マードヴァはいいひと（愛人）といっしょになって

牛飼いの、地味な娘を忘れてしまったの

ねえ、お友達――

あの賢くてやさしい人が

顔かたちの美しさに降参してしまふなんて

ヴラジャの若者、マードヴァ、シャーマ、い
ずれもクリシュナのこと

いったい誰が想像できたでしょう
私にはとても予想できなかったわ
やっぱり私は馬鹿だったのね……

あの方の姿を夢中で見つめるばかり
あの方の足を胸に抱くことばかり考えて
ほかのことに気をまわす余裕がなかったの

ねえ、お友達——

今となつては、ヤムナーの流れに身を投げるか
それとも、いつそひと思いに毒を飲んで……

いやいや、つる草で首をしめ

若いタマラの木にぶら下がりましょう

だってタマラはあのかたの肌の色にそっくり

ねえ、お友達、それでも死ねなかつたら

シャーマ、シャーマ、シャーマつて

あの方の名を死ぬほど称えて

称え疲れて死んでしましましょう

歌を聞いて、タクールも信者たちもうつとりとなつてしまった。タクールとラカールは涙を流している。ナレンドラは再び、ヴラジャの牛飼ゴロビい女ビイになつた気分ゴロビで、法悦に酔つたかのようにキールタンの節回しで次の歌をうたつた。

お友達――

あなたは私のもの、私のすべて

あなたに何を差し上げたらいいのでしょうか

私は身分も財産も才能もない、ただの女だから

あなたに何を差し上げたらいいのかわからない

手にとってはあなたは鏡、頭にとっては花

あなたを花にして私の髪に差しましょう

外から見えないように髪の中にかくしておきます

黒い髪シムに黒い花ム、誰の目にもとまりません

目にとってはあなたはさわやかな目薬

口にとっては香ばしい嚙みタバコ

いつも目につけ、口で味わつていきましょう

体にとってあなたは白檀、首にとっては首飾り
芳しい白檀を体にぬって身と心を静めましょう
シャーマの首飾りを首にかけたら

あなたはいつも私の胸に住んでいる

鳥にとってあなたは翼、魚にとっての水

あなたは私という家のご主人

何よりも大事な尊い宝玉——